

津波碑の存在認識に関する基礎研究 ―岩手県陸前高田市の事例―

東北大学大学院工学研究科 学生会員 ○平川 雄太
 東北大学災害科学国際研究所 正会員 佐藤 翔輔
 東北大学災害科学国際研究所 正会員 今村 文彦

1. はじめに

津波災害を受けて建立された津波碑が、将来の津波災害による人的被害の低減に寄与するには、少なくとも地域住民にその存在が認知される必要がある。津波碑の認知に関する既往研究では、住民数名への聞き取り調査による定性的評価に留まっていること¹⁾や、一つの津波碑のみを対象とした調査であること²⁾から、どのような津波碑が認知されるのか、津波碑がどの程度の影響範囲を持っているのか等の認識に関する特性は不明である。本稿では、質問紙調査を実施することで、津波碑の存在認識に関する特性を定量的に評価する。

2. 研究概要

本研究の対象地域である陸前高田市には、明治三陸地震津波および昭和三陸地震津波の津波碑が計 24 基存在している（図-1）。それらはある程度の空間的な広がりを有していることに加え、属性（慰霊型や教訓型など）や建立場所（寺社や県道脇など）が異なる構成となっている。質問紙では、陸前高田市に存在する 24 基の津波碑の位置および写真を示し、東日本大震災以前に、過去の津波災害に関連する石碑であることを知っていたもの全てにチェックを付けてもらい、チェックを付けた津波碑のうち、回答者の自宅の最も近くにある石碑について、知った時期・知ったきっかけ・石碑との関わり等の項目に回答してもらう形式とした。

質問紙は、陸前高田市の応急仮設住宅および災害公営住宅の計 1,560 世帯へポスティングにより配布を行い、世帯の代表者一名に回答してもらい、郵送による回収を行った。有効回収数は 357 部（有効回収率 22.9%）であり、20 代と 90 代の回答者が少ないものの、性別・年齢に関しては概ね偏りはない。

3. 津波碑の認知度

質問紙調査の結果、回答者全体の津波碑の認知度（津波碑を認知している住民の割合）は 35.0%であった。しかし陸前高田市には、津波碑が複数存在する地域と、一つも存在しない地域が混在している。そこで図-2 には、より小さい地域スケールの町・大字単位で、津波碑の認

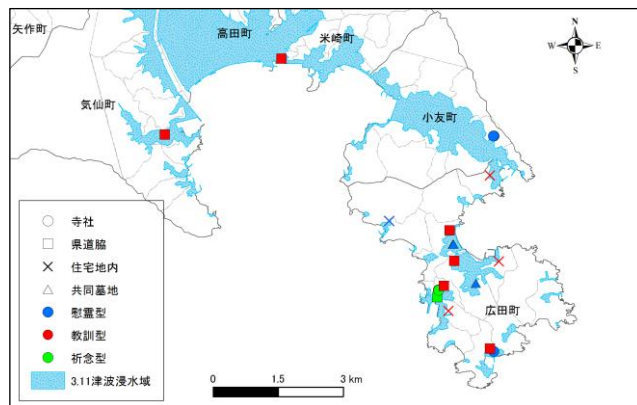


図-1 陸前高田市の津波碑分布

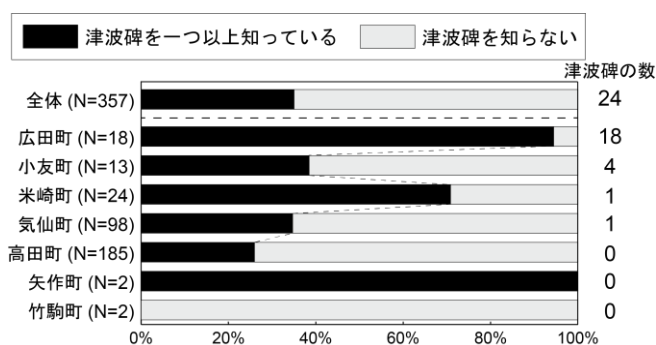


図-2 町・大字別の津波碑の認知度

知度を比較した結果を示す。サンプル数に違いがあるものの、津波碑が多く存在する広田町では認知度が高く、津波碑が存在しない高田町や 1 基しか存在していない気仙町では認知度が低くなる傾向が読み取れる。この点から、一つの津波碑が市町村全体に影響を及ぼすことは考えにくく、地域住民に認知される範囲に限界があることを初めて定量的に示すことができた。

図-3 に、属性、建立場所、形状別の津波碑の認知度を示す。津波碑の属性や建立場所によって認知度に差が生じていることがわかるが、属性に比べて建立場所の方が、認知度の平均値に大きな差がある。寺社は慰霊型 6 基、祈念型 1 基であるのに対し、住宅地内は慰霊型 1 基、教訓型 4 基であるが、寺社の津波碑の認知度の平均値が高いことから、建立場所が認知に大きく影響している可能性がある。また形状別の認知度の平均

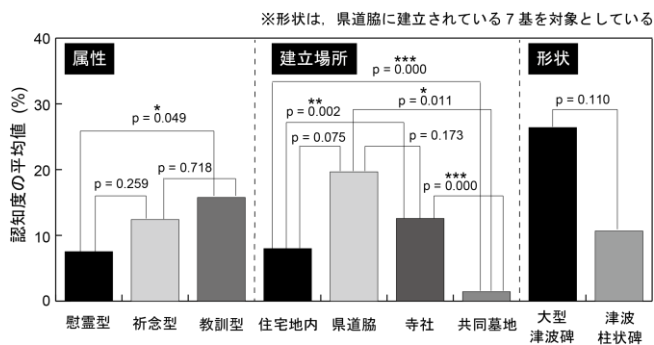


図-3 属性・建立場所・形状別の認知度の比較

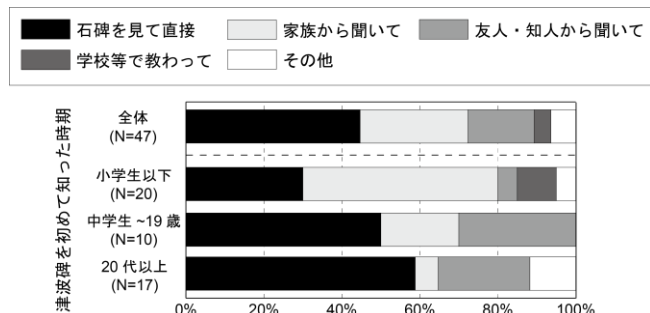


図-4 津波碑を初めて知った時期と知ったきっかけ

値を比較すると、2倍程度の差があることがわかる。以上より、地域住民の津波碑の認知には、建立場所と形状が大きな影響要素であると考えられる。

4. 津波碑の存在認知の特性

図-4に、転入者を除いた回答者を対象に、過去の津波に関連する石碑であるという知ったかと、どのように知ったかについてのクロス集計を行った結果を示している。津波碑を認知している住民の約6割（47人中30人）が、10代のうちに津波に関連する石碑であると認識できており、さらに小学生以下の世代であっても、3割近くは実際に石碑を見ることで、過去の津波の石碑であると認識したことが明らかとなった。また年齢が上がるとともに、過去の津波の石碑であることを津波碑から直接認識した人の割合が大きくなっており、識字能力の向上とともに、碑文内容を理解できるようになっていることが考察される。以上より、識字能力が十分に身に付いていない子ども世代に対しては、第三者による指導がなければ、過去の津波碑を災害の伝承に生かすことができない可能性があると言える。

5. 津波碑と地域住民の関わり

図-5に、津波碑と地域住民の関わりの有無を示す。一部には、追悼行事を行った、津波碑の周りで遊んでいた等の関わりがあったが、特に津波碑との関わりがなかったという住民が大半であり、生活習慣上での津波碑との関わりは希薄であると言える。また30代を除いて、年齢が若くなるほど津波碑との関わりを持つ住民

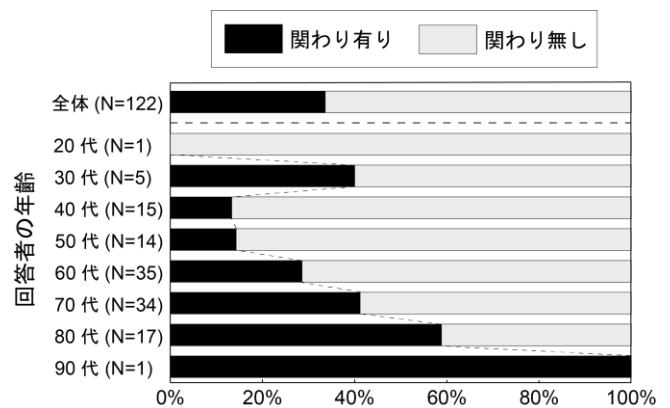


図-5 津波碑と地域住民の関わりの有無

の割合が小さくなる傾向にある。時代の経過とともに、津波碑と地域住民との物理的・心理的距離が大きくなっている可能性を示唆しており、災害伝承媒体としての津波碑の機能が薄れつつあると考えられる。

6. おわりに

本研究では、岩手県陸前高田市を対象とした質問紙調査から、津波碑の存在認識の特性を定量的に評価した。得られた結論を以下に示す；

- 1) 津波碑が多く存在する地域とそうでない地域で津波碑の認知度に差があり、一つの津波碑が市町村全体に影響を及ぼすことは考えにくく、地域住民に認知される範囲に限界があることを示した。
- 2) 県道脇に建立されている津波碑の認知度が高く、さらに大型津波碑の認知度が柱状碑に比べて2倍程度高かったことから、津波碑の建立場所および形状が、地域住民の認知に影響を与える大きな要因であると考えられる。
- 3) 識字能力の向上とともに碑文内容を理解できるようになっていることが質問紙調査の結果から推察される一方で、子ども世代に対しては、第三者の指導がなければ、過去の津波碑を災害の伝承に生かすことができない可能性があると考えられる。
- 4) 時代の経過とともに津波碑と地域住民の物理的・心理的距離が大きくなっている可能性があり、災害伝承媒体としての津波碑の機能が薄れつつあると考えられる。

参考文献

- 1) 斎藤平：津波記念碑の伝承，皇學館大学文学部紀要，Vol.46, pp.78-91, 2008.
- 2) 高松めい，加藤聖也，稲垣淳也，李東勲，日詰博文，川島貫介，古谷誠章：東北地方太平洋沿岸地域における伝承表現と集落構成研究-岩手県田野畑村の津波減災から-（その1），日本建築学会大会学術講演会梗概集，pp.959-960, 2013.